

式辞

寒さも和らぎ、木々の新しい芽吹きを感じる今日の良き日、福岡県教育委員会 委員 木下比奈子様、同窓会会長 津田純嗣様、PTA会長 有馬裕様をはじめ、多くの御来賓、保護者の皆様のご臨席のもと、三年生 四百二十九名全員が、今日、卒業を迎えますことは、誠に喜びに堪えません。

さて、卒業する君たちは令和四年入学、新型コロナの影響で様々な学校行事なども制限がありました。しかし令和五年五月には五類に移り、修猷館での活動も随時戻っていき、令和六年度はコロナ禍など無かったかのように、活躍してくれた君たちでした。様々な変化を乗り越え、創立二百四十周年を迎えた修猷館に、君たちは大きな足跡を残しました。

君たちを修猷生として導いたものの一つに、館歌の存在があると私は考えます。多くの高校には校訓があり、その校訓に沿って教育目標を決めたりします。ところが修猷館には校訓が無い。しかし、それに替わるものとして、館歌が、修猷生の精神的な礎となり、館友をつなぐ重要な役割を果たしているように、私には見えます。歳月を経ても、場が違ってても、先輩でも後輩でも、館歌を歌えば、修猷生は世代を超えて一つになれます。修猷の同窓会を通じて、そのような場面を数多く見せていただきました。

また、館歌が、修猷生の指針となるような内容であるのも、他の学校にはあまりない、一つの特徴でしょう。では、どういう指

針か、ここからは、少々私見も入りますが、御容赦ください。

館歌の一番、これは過去。これまでの修猷館の先輩たちの功績。

「星」は修猷館の象徴、それが「西のみ空に輝ける」とは、修猷館を卒業して全国に散らばった館友が、日本の西に位置する修猷館を思い、その輝きよ永遠にという願いが込められています。続く「光荣ある成績」、「海の内外 陸の涯」には、藩校修猷館時代から、日本だけでなく世界で活躍する、数多の修猷館の先輩方の姿を彷彿とさせます。今も多くの先輩方が各方面で、「世のため に」大いに活躍されており、「尽くす館友幾多」には、先輩の功績を称えるだけでなく、今の修猷生よ、それに続け、という強い願いも込められているはずです。

そして二番、これは現在。ここ西新の地に集い躍動する、一千有余名の修猷生たち。青春という年代にふさわしく、あふれんばかりの情熱を持って、「久遠の理想」言い換えれば、限界の無い未来を追い求めている。そして、「いそしみ勤めん文に武に」とあるように、あらゆる活動に力を惜しまない修猷生の姿があります。卒業する君たちも、この三年間、勉学、部活動、大運動会や大文化祭に代表される学校行事などに、それぞれに力を尽くし、記録や思い出を残しただけでなく、自分自身を大きく成長させたはずです。

最後に三番、これは未来。修猷館を卒業した後、いかに進むべきかを示唆しているようです。「猷を修む」とは何か、それは真心を持って事物に当たるべしと言い切る。質朴剛健、しっかりとした気をみなぎらせ、誠実に取り組む。そして常に向上しようとする

前進し、「我らが使命を果たしてん」我らの使命をきつと果たそうぞ、と自他ともに強く呼び掛けています。「我らが使命」とは何だろう。端的に言えば、在学中によく言われた、世のため人のため、なのかも知れません。ただその具体は人それぞれ、各人の進む道で誠心誠意取り組めば、自ずと人として成っていくはずで

す。

修猷館の館歌は、今から百年以上も昔の、大正十二年制定。若干の文言の変遷はあったものの、ほぼ制定当時のまま。しかし改めて見ると、古さを感じさせず、今でもその示すところは修猷生の指針となり得べきものです。館歌二番のように高校生活を送った君たちは、卒業後に館歌三番のように進み行き、館歌一番のように称えられる人となるのでしよう。そしてそれは、はるか前の先輩から、君たち、そして未来の後輩へとつながっていくはずで

す。

さて、保護者の皆様、御支援・御協力大変ありがとうございます。修猷館は昔ながらの部分も多くあり、保護者の皆様にとっても、不便で不親切なところが、多分にあったのではないかと思います。それでも修猷館の教育を御理解いただき、様々なところで御支援いただきました。お子様が卒業しても、修猷館が今後唯一無二の修猷館であり得るよう、教職員一同、これからも精進してまいります。

終わりに、ここにお集まりの皆様の、ますますの弥栄と御多幸を祈念しまして、式辞といたします。

令和七年 三月 一日

福岡県立修猷館高等学校

第三十四代館長

中神

智文